

はじめての

# 万葉集

[vol.75]

日本に現存する  
最古の和歌集「万葉集」を  
わかりやすく紹介します

## み吉野の 玉松が枝は 愛しきかも 君が御言を 持ちて通はく

額田王

卷二 (一一三番歌)

訳  
み吉野の立派な松の枝はいとしこよ。  
あなたのおことばをもって通つて来るこよ。

蘿生せる

松の柯



この歌は「吉野より蘿生せる松の柯を折り取りて遣はしし時に、額田王の奉り入れたる歌」と題さ

れた一首です。直前の歌が天武天皇八(六七九)年の吉野行幸に同行していたとされる弓削皇子との贈答歌であることから、この歌も、吉野にいる弓削皇子から都にいる額田王へ松の枝が贈られてきた際の歌と考えられています。

「み吉野」の「み」は吉野の神聖さを表現する言葉といえ、ほかにも「み熊野」などの例があります。また、「玉松が枝」の「玉」も、美しい、立派だ、という意味で「松が枝」を讃美する言葉です。

そんな吉野の立派な松の枝が「おことばを持つて通つて来る」とは、松の枝を擬人化したおもしろい言い方です。実際に松の枝が何かしゃべったわけではないでしょうが、何かを雄弁に伝えていた可能性が考えられます。

手掛けたのは、弓削皇子が「蘿生せる松の柯を折り取りて

遣わしたという題の記述です。

平安時代の辞書である『和名類聚抄』には「松蘿」はサルオガセのことだと記されています。サルオガセとは松などに着生する、地衣類といふ菌類と藻類の共生生物です。見するとコケ植物のように見えることから、マツノコケとも呼ばれます。一方、中国最古の詩集である『詩經』では、「蘿」が一族が和合して繁栄する象徴として詠まれています。

この歌は、額田王が六十歳を過ぎた頃の作です。四十歳以上も年下の弓削皇子は、『詩經』を踏まえて額田王に「蘿生せる松の柯」を贈ることで、彼女の長寿と繁栄を祝ひだのだと指摘されています。中國文学にも通じていた二人ならではの、機転の利いたやり取りだったといえそうです。

**奈良の豊かな  
自然を守るために**

県内には多くの動植物が生息・生育しています。今回紹介する歌にも松が出てきますが、「奈良県版レッドデータブック2016改訂版」(有料)では、4種のマツ科の植物が絶滅危惧種に選定されています。

県では、「奈良県希少野生動植物の保護に関する条例」に基づく保護管理事業の実施やレッヂデータブックなどの作成による普及啓発を通じて、希少な野生動植物を保護し、豊かな自然を次の世代に引き継ぐための取り組みを進めています。

**万葉ちゃんの  
つぶやき**



万葉ちゃん



県景観・自然環境課 ☎ 0742-27-8757